(一)　第662号　昭和27年月925日 第三種郵便物認可　THE MIIKE　【毎週日曜日発行】　昭和36年(1961)3月5日（日）

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話3033番 7140番
編集兼発行人　境　孜

差別・切崩しに動ぜぬねばり強い抵抗力で、春闘をたたかいぬこう。

# 一せいにスト突入〈27日〉

## 増産手当で会社卑劣な切崩し図る

政策変更の指標のもとに炭労全山が二十七日、いっせいに二十四時間ストに突入した。ついで三月四日には、総評、中立労連の春闘第一次行動の中で時間外職場大会をひらき意志統一を行なった。ところが、卑劣な会社はスト日の出勤者に政策的な増産手当を支給して、三池労組へ計画的な切崩し攻撃をかけてきたのである。われわれは会社の卑劣な計画を見抜き、さらに団結を強化してたたかわなければならない。

### 十三地区で決起大会

政策変更闘争および見島、宇部の合理化反対闘争について炭労では二十七日全山一斉二十四時間ストを三月四日勤務時間外の職場大会を指令した。

この指令にもとずき、三池労組では二月二十四日指令第一号を発して、二十七日の二十四時間スト、三月四日の職場大会を指示した。二十七日のストは炭労全山いっせいに行なわれたが、三池労組では午前十時から十三カ所（七タグラウンド、新地公園、宮原社宅広場、勝立グラウンド、臼井社宅広場、新港社宅広場、港務所南社宅広場、原万田社宅広場、万田公園、四山支部裏、大平社宅広場、緑ガ丘、岩津社宅広場）に分かれ地域ごとの決起大会をひらいた。

各会場にはひさしぶりで鉢巻をしめた組合員、主婦がぞくぞくとつめかけ大会を開催、大会は執行部挨拶をうけ経過報告が行なわれたあと三井鉱山梁木社長、三池鉱業所若林所長あての抗議文、池田首相、中央・地方関係官庁への要請文、宇部・見島労組への激励文をそれぞれ万場一致で採択した。

このあと組合員の意見発表があり労働歌を合唱して解散した。

いまわれわれは差別と減賃による苦しい立場に立たされているが、あくまで抵抗をつよめ、みんなが団結をいっそう固めてたたかい抜くことを、大会でつよく誓いあったのである。

ところでこの日のストに、会社は三池労組からの保安要員、業務要員の差出しはいらないという態度に出て、結局三池労組からは病院勤務者さえ拒否するという例のない態度に出た。この日三池労組から業務要員として出たのは保育園の保母さん六名だけであった。このため看護婦さんたちは早朝から各病院の前で患者さんたちにビラを配り、闘争の実態を訴えた。

会社は資金難を理由に一方的に賃金、期末手当の分割払いを強行しているし、またけい肺患者の治療や生活補償を三年で打切るというむごい仕打ちをやっていながら、その退職金さえまだ支払っていないのに、切崩しには高額の金をバラまくという卑劣さである。

今日の状態は係員の指示権の確立、出勤予約制度などきびしい労務管理は一五・〇〇〇トン体制を至上命令として、毎日が出炭中心の作業管理の状態にある。その結果四山、三川で二人の死亡者を出している実態である。

### 増産督励をした第二組合幹部

平常でさえもそのような条件であるのに政策的な増産をさせようとした会社、それに双手をあげて協力し、むしろ繰込場で出炭督励をやる幹部の下にいる第二組合員はみじめである。

会社がスト日に出炭したという九・九二五トン出炭のカラクリをあばいてみると

一、労働者の権利である特休を制限し、通常出勤七六%をその日は八九%にと半強制的な出勤督励をしている。

そして職場では昼食時間も与えられなかったと東新聞は報じている。

二、三川鉱では第二組合の組合長いか幹部が繰込場に出向き「今日こそ新労の本領を発揮し出炭に全員一致して努力せよ」と激励し出炭督励をした。

三、スト前日の二十六日の公休日に運搬準備、切羽作り、材料準備、故障整備と、つまり出炭のためのあらゆる準備一切をし二十七日に備えていたのである。

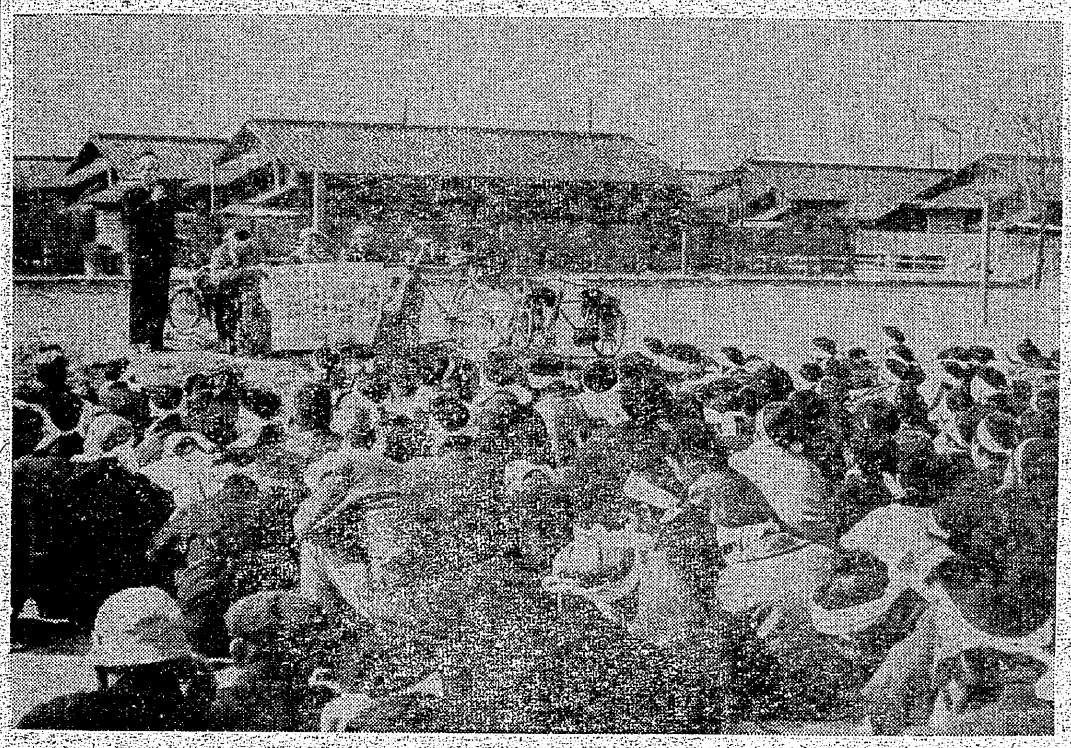
四、間接部門の作業員を出炭部門に配役替をし、はなはだしいことは勤務時間の変更、港務所の運搬関係などはふつう八時間の労働時間だが、十二時間の労働を指示している。

五、二十五日三番方の坑内残炭二十六日公休日の出炭分および二十七日出炭と通常坑内残炭する分も当日は坑外まで搬炭している。

その好例として宮浦選炭場では翌二十八日の一番方では、送炭が止まって一時作業が停まるということが起きた。そのことは通常坑内残炭があるのに、二十七日だけなかったためである。

われわれは第二組合員がひどい労働強化を強制された上、労働者の団結を破かいしようとする会社の政策的且つ恩恵的な増産手当をうけることが、労働者として将来を幸せにするものでないことを知らねばならない。

わずかな金で第二組合員を懐柔をよそおって、三池労組を切崩そうとする計画的な、不当きわまる差別攻撃が今回の会社の増産政策のねらいであった。」



地域の決起大会で団結をかためた（写真は新地公園で）

## みいけ日誌

2月26日　三川支部団結駅伝 政策変更陳情及び座り込み団上京

27日　政策変更24時間スト企画委員会

28日　企画委員会、労働部長会議、就職対策＝三興タクシー聴聞会（於福岡市）

3月1日　団体交渉、大地評執行委員会

2日　企画委員会、主婦会中央執行委員会、ビキニ被爆七周年記念講演会（於市民会館）

3日　団体交渉

4日　団体交渉、政策変更時間外職場大会、総評第一次統一行動日

## 特休制限で出勤督励

### 九九一五トンのカラクリ

一方、会社はこの日の二十四時間ストをねらい政策的な増産を強行し、その結果九・九一五トンもの出炭だったと宣伝して、当日の出勤者に一人当り五〇〇円（欠勤者には第二組合員のみは三〇〇円）の増産手当を支給するという卑劣な手段をとってきた。これは三池労組のストは無力であるという宣伝などをねらい、第二組合員に政策的な増産を強制し、三池労組を切崩そうとした攻撃である。

## 田川労組が満場一致で三池カンパ決定

「スクラム第三号」で既報のように、田川労組はさる二月二十七日の臨時総会で、三池労組への六〇〇円カンパを満場一致で決定したこのカンパは昨年の第二十七回炭労臨時大会で決定されたものだが、三鉱連関係では内部事情のため一時その実施が延期されていたもので北三連の美唄、芦別、砂川では昨年末から実施しており、田川労組も昨年十月にさかのぼってその実施を決定したものである。

これまで一部には、三鉱連関係の三池へのカンパ問題をとりあげ、三池労組の切り崩し宣伝に利用していたが、それは事実に反したデマであることが、いま明らかになった。われわれは田川の仲間に感謝し、さらに団結を固めて会社の差別攻撃に対決して行こう。

## 陳情や座込み

### 三池からも三名が上京

炭労の政策変更のたたかいは、さる二十七日の二十四時間ストの実力行使にはいり、国会の審議状態と関連して、いよいよ本格的なたたかいへと発展してきた。

一方、炭労としては中央での闘争を進めるため、関係官庁への陳情や座り込み、情宣などをこんど精力的に行なうことになり、各山からそのための人員を要請していたが、三池から沢田満（宮浦）安田栄二（四山）野口観造（三川）の三氏が、二十六日出発、いま中央で活動にくわわった。

## 視聴覚研究集会

### コンクールで三池に優秀賞

吹きすさぶマスコミ攻勢に労働者はどう対処し、政府や独占資本のもくろむ〝総白痴化〟をどうはねかえすべきかの点について、総評では早くから注目していたが、その具体的対策を論議するため、昨年二月伊東で「総評第一回視聴覚研究集会」が開かれ、そこでの結論に基いて、この一年間、全国各地で創意ある視聴覚運動が展開されてきた。

その活動を集約論議し、一年間に現われた成果と欠陥を正しく評価して更に今後の視聴覚運動を前進させていくため、さる二月十三、十四、十五の三日間、栃木県鬼怒川で、「総評第二回視聴覚研究集会」が全国から五一二名の参加をえて開催され、有意義に終った。

この集会では、全国各単産各単組のこれまでの文化教宣活動についての諸経験や問題がとりあげられ、こんど労働者の文化を育てたかめていくことについて討議・研究がおこなわれた。

三池闘争における文化教宣活動についても、炭労を通じて特別報告がおこなわれ、三池闘争の中にあらわれた敵のマス・コミや炭労、三池労組を中心とする文化、教宣活動の中から教訓が学びとられたなお、集会で三池闘争をおさめたスライドが優秀賞に表彰され組合に賞状と記念時計、ブロンズがおくられてきた。

× × ×

## 労働者は人間である

三川一組　合員

いまここに自分が気付いたことを書いてみようと思う。

三井鉱山という会社は、得てして昔から悪質な会社であることは大牟田の土地に住む古老ならば大概の人が知っているが、それを口に出さないものがいるとすれば、それは自分の息子の勤め先だから三井さんから食わせてもらっているからなどと、とんでもないことを思っているからであろう。われわれのように昔から土着して住んでいる者は、三井さんがもしや大牟田で企業をおこさなかったとしても、食うには困りはしなかったはずである。三井がのこのこでしゃばってきたばかりに、知って住み難くなったというても過言ではないと思う。

こんどの争議をみても、会社のやり方はあまりにも悪らつすぎる。それにまた労働者でありながら、労働者の精神を忘れ分裂を策動した連中は、まるで飼いならされた動物にも等しいと思う。

そういえば争議中会社内にろう城期間中、会社は第二の連中共を確詰で賄ったそうだが、安ならの生身のロボットがたくさんできたことは、会社としても喜びに堪えない次第であろう。

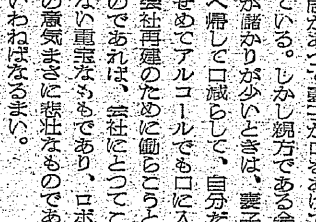
みよ、三十五年十二月一日生産第三次とロボット製造に賭命になることだろう。もしそのロボットが安いアルコールと麦飯が少しあったら一日中でも動いている代物であるなら、なま半可な機械よりも安くてすむというものである。

ロボットとはいっても一軒の住居があって妻子が口をあけて待っている。しかし親方である会社様が諸かりが少いときは、妻子は里へ帰して口減らして、自分だけはせめてアルコールでも口に入れて会社再建のために働らこうというのであれば、会社にとってこの上ない重宝なものであり、ロボットの意気まさに壮なものであるといわねばなるまい。

われわれ労働者は、まず第一に人間らしい生活を営まねばならないのだから、まじめにはたらき生産をあげるというのは当然ながら会社のねがうようなロボットにはとうていなれるものではない。

銅いならされたロボットは機械のごとくよく動く。会社は二タリとほくそ笑んだことであろう。

第二組合員にしても第二組合は御用組合であると思っていたものもいるだろうが一




一体会社は差別待遇したからといって、どれだけの効果が上がると思っているのだろうか。

アルコールの入っているロボットならば、自分の生身がどのように損傷しているかも知らずに、職制から朝一回ニラまれると、一日中ちぢみ上がって二十日ねづみのようにそこいら中をはいずりまわって働くかも知れない。

会社もこのさい、労働者についても少し真剣に考なおすべきではなかろうか。労働者である以上みんなまじめに働こうという気持をもっている。しかし、労働者はロボットではなく人間である。どんなに差別や切崩しをもってしても労働者はロボットにはならない労働者こそ真の人間なのである。